



すべては
みんなの
笑顔のために

ひびき

〒384-0006
小諸市与良町6-5-5

Tel. 0267-31-0251 (学校教育関係)

0267-31-0252 (生涯学習関係)

Fax. 0267-31-0140

バックナンバーはこちらから



vol. **2**  **東信教育事務所**

「まなざし」

令和 8 年
(2026 年) 7/3



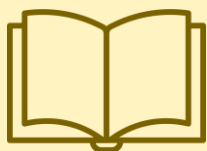
小学6年生、歴史、弥生時代の授業。教材研究で、当時の地域の様子を教師自身が調べる中で、縄文時代に比べ、むらの数が減っていることに気づきました。「なんで減ったんだろう？」教師の中に問いが生まれ、教材研究を進めました。「この子たちはどう考えるだろう？」ワクワクして臨んだ授業当日。子供たちの資料の読み取りや発見に思わず惹き込まれ、「まなざし」を同じくしていった教師と子どもの姿がここにありました。



あさまる



ちくまひめ



授業から学ぶ

**子どもを真ん中に
置いた授業づくり**

～ A 中学校 B 先生の授業から学ぶ～



研修の窓

研究推進のススメ

～大切にしたい3つの「視る力」～



考える部屋

まなざし

～子どもを「見る」ということ～



地域への渡り廊下

**共に育てる、
共に支える**

～地域と学校のかたち～

授業から学ぶ
中学1学年
保健体育
陸上競技
「リレー」

子どもを真ん中に置いた授業づくり ～A中学校 B先生の授業から学ぶ～

5月19日、初任者研修として、先輩教師の授業公開が4つの学校で行われました。今回は、A中学校のB先生の授業をもとに、参加した初任者の感想を交えながら、これからの授業づくりについて考えてみましょう。

単元を通した学習問題を「スムーズにバトンパスをするにはどうしたらよいだろう」に設定し、本時は正確性やスピードに注目しました。アンダーハンドパスとオーバーハンドパスのよさや難しさを実際に試しながら気づいたことを仲間と伝え合い、どちらのバトンパスが自分たちに合っているかを考える授業でした。



ホワイトボードに
学習の見通しを掲示



パスのポイントだけを
実演を踏まえ確認

<初任者の感想>

今日やることが板書され、デモンストレーションが行われていた。生徒は何をするか把握できており、スムーズに活動に移ることができていた。導入場面の大切さを学んだ。



とても丁寧な授業準備が印象的でした。子どもたちがイメージしやすい環境・準備をされていてとても勉強になりました。



アンダーハンドパスとオーバーハンドパスの
どちらが自分たちに合っているか、バトンパスの
場面をひとつひとつ確認していく姿



自然と対話が生まれ、
「スムーズにバトンパスをする」ために、
主体的に活動に取り組んでいく姿



やってみる人、丁寧に見る人などの活動時の役割を指定したけど、みんな互いによく関わっているから、みんなの状況に合わせて自由に変えていいよ。

授業の計画があっても、生徒の様子で臨機応変に授業を進めることの大切さ、大事なことを学びました。



Cさん：アンダーよりオーバーの方が私は好きかも。（全員うなずく）
Dさん：うちら全員オーバーでいい。
先 生：どうして？
Eさん：アンダーは渡すときに見えにくい。でもオーバーは見えやすいし、失敗が少ないと思う。

最初はバトンの渡し方をアドバイスする時に、理由を具体的に言えなかった子が、授業を通して説明が具体的にになっていきました。これは、授業のねらいが据わっていたからだと思います。



指導案の推敲を重ね、生徒の思考予測や授業のねらいを整理し続けたことが、主体的・対話的で深い学びへとつながりました。「子どもを真ん中に置いた授業づくり」を練り上げてきたからこそ、生徒の意識に応じて臨機応変に対応できたのです。



研修の窓

研究推進のススメ ～大切にしたい3つの「視る力」～

学校改革の軸となる授業改善に向けて、校内研究が進んでいます。中心となって進めている研究主任の先生方は、どんなことを大切にしているのでしょうか。研究主任研修会の様子から考えてみましょう。

初めて研究主任になったA先生



何から取り組めばいいかわからない。どうやって校内研究を進めていけばいいのだろう？

研究主任
3年目のB先生



授業改善推進の必要性について全職員で共通理解を図っていくには、どのようにしたらいいのだろう？

各学校、抱える悩みは様々なようです。では、悩みながらも研究を前向きに進めようとしている先生方は、研究推進をどのように思い描いているのでしょうか。

研究を回すことばかり目が行きがちでしたが、**子どもの何を見るのか、何を成長ととらえるのか**、大事にしていきたいです
【視座】

研究テーマ実現に向けて、**子どもだけでなく先生方のやりがいにもつながるように「持続可能な形」**を模索したいです
【視野】



研究主任の先生方の
対話の様子より

全部やろうとせず、**授業の1つの場面に焦点を当てて**研究を進めることで、研究に深まりが生まれそうです
【視点】

先生方それぞれの持ち味を生かしつつ、新しいことに一緒に**挑戦していこうとする雰囲気**づくりを意識したいです
【視野】

研修会での先生方の姿を見ていると、大切にされている見方にはいくつか共通するものがあるように感じました。それは・・・



研究を見つめ直す3つの「視る力」

視座

様々な立場から
研究を見つめる力

誰の立場から
考えるか

視野

学校全体や先生方
一人ひとりの
実態を見渡す力

どんな範囲を
見渡して行うのか

視点

大切にしたいこと
を焦点化する力

どんなことに
力を入れていくのか

(参考)
研究推進
年間計画例



研究推進計画や現在の様子において、3つの「視る力」を「研究を見つめ直すレンズ」のように用いることで、研究推進の進捗具合の確認や新たな取組へのヒントの発見などにつながりそうです。学校訪問支援が始まっています。悩んだり困ったりしたときには、ぜひ指導主事の訪問をご活用ください。



考える 部屋

まなざし ～子どもを「見る」ということ～

私たちは、日々、子どもたちの姿をたくさん「見て」います。教師として、子どもの姿を本当に「見る」「まなざす」とは、ということなのでしょう。

7月を迎え、子どもたち一人一人の様子が見えてきた頃ではないでしょうか。子どもたちの生き生きとした姿が目飛び込んできて、微笑ましくなる一方で、次のような思いが浮かんでくることもあるのではないのでしょうか。

「Aさんは、今日も集中できていないな…」
「Bさんは、また友達とけんかをしているな…」
「Cさんは、注意したのに、また同じことを繰り返しているな…」



イラストはGeminiにて作成

目の前に見える子どもたちの行動や言葉が、「気になるもの」「よくないもの」として感じられる。そうしたことが、私にもしばしばあります。

そんな時、私の心に浮かんでくる、子どもを「見る」「まなざす」ことに関わる、いくつかの言葉があります。

行動にはすべて目的がある

(心理学者：アドラー)

子どもの行動を、点ではなく、線で捉える

(令和8年青本P36)



物となって考へ 物となって行ふ

(哲学者：西田幾多郎)

一番下の、哲学者 西田幾多郎の言葉は、私が初任の時に、校長先生の机に、手書きで書かれて貼られていた言葉です。当時はその意味するところが十分につかみきれませんでした。教師としての経験を積み重ねるうち、少しずつ、その意味や奥深さがわかってきました。

「物」を「子ども」に置きかえて、考えてみてください。



地域への 渡り廊下

共に育てる、共に支える ～地域と学校のかたち～

地域とともにある学校とは、どのような学校なのでしょう。
今回の「地域への渡り廊下」では、南牧村の取組から、その具体的な姿や可能性について改めて考えていきます。

地域とともに
ある学校？



地域でどのような子供たちを育てるのか、何を実現していくのかという目標やビジョンを地域住民等と共有し、地域と一体となって子供たちを育む学校

令和2年 文部科学省「コミュニティ・スクールの作り方」



南牧村では、令和13年度の義務教育学校の導入に向けて「地域とともにある学校」への転換をめざしています。その第一歩として、学校と地域の方々が気軽に語り合う場として「南牧みんなでつくる コミュニティ・スクール」がスタートしました。

南牧みんなでつくる コミュニティ・スクール

【参加者】 50名（中学生1名、学校関係者13名、地域住民36名）

【研修会の主な内容】

- 講演「これからのコミュニティスクールに求められること」
- グループトーク「南牧を愛する子どもを育むためには」
- ふりかえり



これから



- 南牧村で取り組んでいきたいこと
 - ・自然体験を重視したイベントの構想
 - ・世代を超えた交流の重視
 - ・日常的な「ふれあい」を大切にする
 - ・子どもとともに楽しい時間を過ごす

【私・学校・地域にできることは】

提案

- 愛されていることを実感できる場をつくる。
- まずは毎朝登校する子どもたちに「おはよう」の声掛けをする。
- 南牧村の好きを他の市町村に伝える取組を行う。（他校との交流も）
- 海ノ口城の歴史を訪ねながら地元の人たちと遠足をする。
- 子どもの好きを地域の方の好きや特技につなげる。

【一方で...】

- 今後の壁
 - ・学校・家庭・地域の役割分担と責任
 - ・子どもの主体的参画をより促す工夫



「南牧を愛する子どもを育むためには」をテーマに、学校関係者と地域住民が和やかに語り合う姿が印象的でした。参加者からは、「先生たちとこんなにじっくり話したのは初めて。楽しかった。」といった声も聞かれ、対話を通して互いを知り、つながることの大切さが改めて感じられました。地域とともにある学校づくりの第一歩は、まず話してみることから始まります。グループワークや研修会等の企画・運営は、生涯学習担当がサポートいたします。学校と地域をつなぐきっかけづくりに、ぜひお気軽にお声がけください。

